

欠損駆動思考 — 概要版

棄却される誤差を、問いとして拾う

2026 年 02 月 05 日

目次

1	はじめに	3
2	コア定義 (Core Definitions)	4
2.1	定義一覧	4
2.2	D1: 欠損駆動思考 (Kesson-Driven Thinking)	4
2.2.1	定義	4
2.2.2	位置づけ	4
2.2.3	補足	4
2.3	D2: 欠損 (Kesson)	5
2.3.1	定義	5
2.3.2	構成要素	5
2.3.3	5 類型	5
2.3.4	神経基盤 [P]	5
2.3.5	AI との対比	5
2.4	D3: Withhold	5
2.4.1	定義	5
2.4.2	位置づけ	5
2.4.3	対比	6
2.4.4	関連概念 (群盲象チェック)	6
2.4.5	神経基盤 [P]	6
2.4.6	成立条件 (D3-a)	6
2.4.7	層間再入力 (F-O 循環モデル)	7
2.5	D4: 情動の構成	7
2.5.1	定義	7
2.5.2	F-O 座標系	7
2.5.3	プロセス	7

2.5.4	理論的背景 [P]	7
2.6	定義間の関係	8
2.7	更新履歴	8
3	創造の構造とプロセス：創造の 5 段階（モデル本体）	9
3.1	TL;DR	9
3.2	0. 読み方（層の区別）	9
3.3	1. 位置づけ（主張と非主張）	9
3.3.1	1.1 主張	9
3.3.2	1.2 非主張（やらないこと）	9
3.4	2. 欠損駆動思考における M2 の役割	10
3.5	3. 5 段階（定義）	10
3.6	4. 発散と収束（5 段階で見る）	10
3.7	5. 各段階の「診断」と「次の一手」	11
3.7.1	Stage 1: 場（未分化）	11
3.7.2	Stage 2: 波（分離）	11
3.7.3	Stage 3: 縁（境界）	11
3.7.4	Stage 4: 渦（立ち上がり）	11
3.7.5	Stage 5: 束（構造化）	11
3.8	6. 比較の作法（類似と相違を同時に扱う）	12
3.8.1	6.1 簡易比較表（先行研究/実践枠組み）	12
3.9	7. スピノルは「補助線」の一つ	13
3.10	8. 次の改稿ポイント（収束のための ToDo）	13

1 はじめに

何かが「おかしい」と感じたのに、うまく言葉にできない。そんな経験はないでしょうか。会議で誰かの説明を聞いているとき、旅先で見知らぬ風景に立ったとき、あるいは夜ふとんの中で一日を振り返っているとき——「何かが足りない」「何かがずれている」という、あの漠然とした感覚です。

ふつう、私たちはその感覚を無視します。気のせいだと片づけるか、すぐに答えを出して楽になろうとします。しかし、その「ずれ」にあえて留まり、問いとして持ち続けることが、創造の出発点になる。本書が提案するのは、そういう考え方です。

この考え方を「欠損駆動思考」と呼びます。予想と現実のあいだに生じるずれを、脳は絶えず検出しています。そのずれのほとんどは自動的に処理され、意識にのぼることすらありません。しかし、ときにそのずれが「欠け」として意識に浮かびあがる。その瞬間に、すぐ解決に走るのではなく、少しだけ「待つ」こと。それが、反射的な対処と創造的な思考を分ける分岐点です。

本書では、まずこの考え方の核となる定義を示し、次に創造がどのような構造とプロセスで生じるかを紹介します。

2 コア定義（Core Definitions）

最終更新: 2026-02-05

状態: 確定（Phase 5 で確定済み）

2.1 定義一覧

ID	用語	定義
D1	欠損駆動思考	棄却される誤差を、問いとして拾う態度
D2	欠損（Kesson）	予想と現実の誤差を、意識が「欠け」として捉えた主観的経験
D3	Withhold	反射的に処理せず、誤差を問いとして保持する機能
D4	情動の構成	欠損が F 軸（生存）と O 軸（愛）で評価され、情動として構成されるプロセス

2.2 D1: 欠損駆動思考（Kesson-Driven Thinking）

2.2.1 定義

棄却される誤差を、問いとして拾う態度

2.2.2 位置づけ

- レベル: L2（態度・哲学）
- 上位: プロジェクトデザイン（L1）
- 下位: 欠損駆動開発（L3）、各技法（L4）

2.2.3 補足

- 「思考」は態度・姿勢を指す
- 具体的な方法論は「欠損駆動開発（L3）」で扱う

2.3 D2: 欠損 (Kesson)

2.3.1 定義

予想と現実の誤差を、意識が「欠け」として捉えた主観的経験

2.3.2 構成要素

1. 予測誤差（客観）：予想と現実のズレ [P]
2. 主観的経験（主観）：「欠け」として意識に上る [M]

2.3.3 5 類型

類型	内容
観測欠損	事実と予測のズレ
主体欠損	自己像と現実のズレ
正当化欠損	行動と価値観のズレ
一貫性欠損	信念間の矛盾
意味欠損	意味の喪失・空虚

2.3.4 神経基盤 [P]

- Layer 1（予測-誤差ループ）で検出
- 精度閾値を超えると意識化

2.3.5 AI との対比

- AI: 予測誤差を計算する
 - 人間: 予測誤差を経験する（欠損として）
-

2.4 D3: Withhold

2.4.1 定義

反射的に処理せず、誤差を問いとして保持する機能

2.4.2 位置づけ

- Layer 3（意識の 4 層モデル）
- 「意のゲート」の機能的記述

2.4.3 対比

概念	機能
反応抑制	行動を止める
Withhold	行動準備を保持しつつ再評価

2.4.4 関連概念（群盲象チェック）

- Bion: Container（ β 要素の保持）
- Klein: PS に留まる耐性
- 世阿弥: 秘すれば花
- 葉隠: 忍ぶ恋
- 中庸: 未発の中

2.4.5 神経基盤 [P]

- dlPFC（背外側前頭前野）
- ACC（前帯状皮質）

2.4.6 成立条件（D3-a）

Withhold は個人の意志力ではなく、複数の条件が層的に支えることで成立する機能である。

層	成立条件	具体例	根拠
L0	生理的余裕（恒常性維持）	睡眠、栄養、身体的安全、ワーキングメモリ容量	[P] 神経科学
L0-L1	自律神経調整	安全な関係（E10）、身体的修練（瞑想、武道、呼吸法）、環境設計	[P] Porges, Bowlby; [M] 禅、ヨーガ
L1-L2	外部 Container（構造・制度）	公案、茶道の作法、分析の設定、アンドン、学問のディシプリン	[P] Bion 後期; [M] 世阿弥、茶道
L2-L3	認知的枠組み（メタ認知）	epoché（判断保留）、覚悟（葉隠）、ネガティブ・ケイパビリティ	[M] ストア、Keats → Bion、ハイデガー

安定した関係（E10）は L0-L1 経路の中で最も発達的に根源的なものだが、唯一の経路ではない。

検討経緯: db/decision-log/2026-02/LOG-20260205-001

2.4.7 層間再入力 (F-O 循環モデル)

Withhold (L3) の出力は L1-L2 に再入力され、欠損の意味が更新される。これにより「わからない」の質が変容する循環構造をなす。

Withhold は、F 軸 Containment (生理的安全の確保) のもとで O 軸 α 変換 (問いとしての保持と変換) が作動し、その出力が L1-L2 に再入力されることで欠損の意味が更新される循環プロセスである。

検討経緯: db/decision-log/2026-02/LOG-20260205-002

2.5 D4: 情動の構成

2.5.1 定義

欠損が F 軸 (生存) と O 軸 (愛) で評価され、情動として構成されるプロセス

2.5.2 F-O 座標系

軸	正式名	評価内容	神経基盤
F 軸	Fear/Fight	生存・脅威	扁桃体
O 軸	Others/Attachment	愛着・所属	vmPFC

2.5.3 プロセス

欠損 (D2) の検出

↓

F 軸評価: 「脅威か？」

O 軸評価: 「関係に影響するか？」

↓

情動として構成

↓

Withhold (D3) または即時反応

2.5.4 理論的背景 [P]

- Barrett (2017): 構成主義的情動理論
- 情動 = 内受容誤差 + 文脈 + 評価

2.6 定義間の関係

D1 (欠損駆動思考) = 態度

|

| この態度で扱う対象が

↓

D2 (欠損) = 主観的経験

|

| 欠損を評価するのが

↓

D4 (情動の構成) = F-O 評価

|

| 評価後に即時反応せず保持するのが

↓

D3 (Withhold) = 保持機能

2.7 更新履歴

日付	内容
2025-02-02	Phase 5 確定版を DB 形式に移行
2026-02-05	D3-a (成立条件) 追加。ISS-10 解決
2026-02-05	ISS-11 確定命題 (F-O 循環モデル) + 層間再入力追記

3 創造の構造とプロセス：創造の5段階（モデル本体）

バージョン: 1.1（発散/収束・比較統合）

日付: 2026-02-04

著者: Hiromichi

ステータス: Phase 2 (M2) — 本体ドキュメント

3.1 TL;DR

- 創造は「場→波→縁→渦→束」という **連続的な変換** として観察できる
 - このモデルは、創造を説明するためだけでなく、創造を進めるための **診断と介入の地図** として使う
 - 外部理論（スピノル、神話、先行研究、経営モデル等）は **論拠・類似・検証の参照点** であり、モデルの主語ではない
-

3.2 0. 読み方（層の区別）

- **本体**（この文書）：5段階モデルの定義・使い方・比較の作法
 - **補助線**（数理）：content/m2-creation-process/spinor-five-stages.md
 - **論拠 DB**（比較素材）：db/evidence/（創造性研究/数理/哲学/精神分析/神経科学/ビジネス等）
-

3.3 1. 位置づけ（主張と非主張）

3.3.1 1.1 主張

- 創造は「場→波→縁→渦→束」という **連続的な変換** として観察できる
- 5段階は、思考・学習・設計・表現などの創造行為を記述する **操作可能な中間モデル** である
- 5段階は「発散/収束」を含むが、それを二分法に還元せず、**途中（縁）**の質を明示する

3.3.2 1.2 非主張（やらないこと）

- 5段階を物理学・数学・神話・精神分析から **導出した** という主張はしない
- どの外部枠組みとも **1対1対応** するという主張はしない（対応はスペクトラム的で、ずれ・重なり・欠落を含む）

- 普遍性（どこにでも必ず現れる等）の強い主張はしない（必要なら仮説 [S] として別途扱う）

3.4 2. 欠損駆動思考における M2 の役割

欠損駆動思考では、創造は「よいアイデアを出す能力」ではなく、欠損（棄却される誤差）を問いとして保持し、変換し、構造として残すプロセスである。

- M1（意識 OS）：欠損を検出し、F-O 評価し、Withhold（問いとして保持）を可能にする
- M2（創造プロセス）：Withhold された欠損が、5 段階を通過して構造へ変換されていく過程を記述する
- M3（事業構造）：生まれた構造を検証・実装し、社会的な形へ落とす
- M4（世界観）：検証結果を事前分布として取り込み、次の欠損を生成する

3.5 3. 5 段階（定義）

段階	名称	構造（何が立つか）	プロセス（何が起きるか）	生成されるもの（最小）
1	場 (Field)	無（未分化）	漂う	可能性の母体
2	波 (Wave)	ゆれ・対立	分離	差・方向性（対）
3	縁 (Relation)	境界・関係	繋がり	ルール/制約/接続
4	渦 (Vortex)	個・立ち上がり	包摂・融合	まとまり（プロトタイプ）
5	束 (Bundle)	方向	集合	構造化された成果

3.6 4. 発散と収束（5 段階で見る）

発散と収束は重要だが、5 段階の利点は「発散/収束の間にある縁（境界に留まる）」を独立の段階として見える化できる点にある。

- 発散（拡散）に近い領域: 場→波→縁
 - 収束（統合）に近い領域: 渦→束
 - 注意: 実際は直線ではなく循環しうる（束→場への回帰、渦→縁への戻り等）
-

3.7 5. 各段階の「診断」と「次の一手」

ここでは、理論説明よりも「今どこにいるか」「何をすれば次へ進みやすいか」を優先する。

3.7.1 Stage 1: 場（未分化）

- 観察: まだ言葉にならない/何が問題か分からないが、違和感だけがある
- 落とし穴: すぐに定義しようとして、欠損が欠損のまま消える
- 次の一手: 欠損を「解く」のでなく保持する（Withhold）。素材（経験/データ/印象）を集めて漂わせる

3.7.2 Stage 2: 波（分離）

- 観察: 対立・揺れ・二項が立つ（A か B か、快/不快、正/誤など）
- 落とし穴: どちらかを早く勝たせてしまい、対立の情報量を失う
- 次の一手: 二項を固定せず、複数の「差」を並べる（何が違うのか、どこが同じなのか）

3.7.3 Stage 3: 縁（境界）

- 観察: 境界に留まっている。矛盾が消えず、関係が増えていく。ルール/制約/接続が見えてくる
- 落とし穴: 不快を避けて「どちらか」に逃げる（早すぎる解釈・早すぎる実装）
- 次の一手: 境界の上で関係を編む（対立を保ったまま接続する）。仮説を小さく置き、まだ結論にしない

3.7.4 Stage 4: 渦（立ち上がり）

- 観察: まとまりが立つ。説明可能な形（コンセプト/構造/試作品）として現れる
- 落とし穴: 立ち上がった“個”を守りすぎて、縁での再編集ができない
- 次の一手: 「何を包摂し、何を捨てた渦か」を明確化する（渦の境界条件を言語化）

3.7.5 Stage 5: 束（構造化）

- 観察: 方向が定まり、複数の渦が束ねられて、再利用可能な構造として残る
- 落とし穴: 固定しすぎて、次の欠損を生まない（更新が止まる）
- 次の一手: M3 で検証/実装し、結果を M4 へ戻して次の欠損を作る（束→場への回帰）

3.8 6. 比較の作法（類似と相違を同時に扱う）

5段階は、既存理論の“上位互換”を宣言するためではなく、**ずれを含んだ比較**によって輪郭を得る。ここでは「どこが似ているか」だけでなく「どこが似ていないか」を同じ比重で扱う。

3.8.1 6.1 簡易比較表（先行研究/実践枠組み）

外部枠組み	よく合う部分（例）	ずれ/限界（例）	補助線としての使い方
Wallas（4段階）	Incubation ≈ 場→波 / Illumination ≈ 縁→渦 / Verification ≈ 束	線形で循環が薄い。 Incubation 内部が粗い	4段階の内部を5段階で分解し、戻りを許す
Guilford（発散/収束）	発散 ≈ 場→波→縁 / 収束 ≈ 渦→束	二分法で「縁」の質が消えやすい	「発散/収束」の間に縁を挿入する
フロー（Csik-szentmihalyi）	欠損が適度に処理され続ける状態として読める	どの段階でも起きうるため段階モデルではない	段階“の外側”にある状態として扱う（進行の質指標）
Amabile（構成要素）	動機づけ/スキル/プロセスを M1/M4/M2 に分けて読める	段階の変換そのものは薄い	何が詰まっているかの原因診断に使う
Sawyer（協調的創造性）	5段階を集団にも適用可能（共有空間→テンション→相互作用→創発→合意）	個人内過程と同一視はできない	M3（社会実装）の設計ヒントに使う
SECI（野中）	Ba（場）概念は「生成の前提条件」として類似	社会的コンテキスト（M3）に寄る。M2の場とは次元が違う	「場」を多層に扱い、M2とM3の接続を作る
デザイン思考（d.school）	Define ≈ 波 / Prototype ≈ 渦 / Test ≈ 束	方法論は強いが、Withhold や縁の保持が欠損しやすい	「急いで回しすぎ」を検知する補助線にする
スピノル（数理）	分離→関係→統合を眺める比喻として強い	由来の証明ではない。5段階の全体は覆わない	“強い直観”が必要な局所（2-4）に限定して使う

詳細: [db/evidence/evidence-creativity.md](#), [db/evidence/evidence-business.md](#), [db/evidence/evidence-business-design.md](#), [db/evidence/evidence-mathematics.md](#)

3.9 7.スピノルは「補助線」の一つ

スピノルは、5段階のうち特に「分離→関係→統合」を数理側から眺めるための補助線として有用である。ただし、スピノルが5段階の「起源」や「根拠の中心」ではない。

- 数理側の補助線: `content/m2-creation-process/spinor-five-stages.md`
-

3.10 8. 次の改稿ポイント（収束のための ToDo）

この文書は「本体」として、今後の収束作業で以下を強化する余地がある：

- 各段階の具体例（個人創作/研究/事業/対人）を 2〜3 ずつ追加
- 「縁」の品質指標（どの状態を“縁に留まっている”とみなすか）の定義
- 5 段階 × 4 層（M2×M1）の接続を、最小の図で固定